板書例

1 第一段

最初に小説の背景と登場人物

	1	2	3	4	5
	時代	時刻	場所	季節	都の様子
説明	平安時代末期 （旧記より養和大飢饉一一八一年）	ある日の暮れ方 （明暗の視点→色彩）	京の都の羅生門（南端門）	晩秋 理由（きりぎりすと夕冷え火桶）	下人のほか誰もいない羅生門 なぜか？ 都 地震　辻風　火事　飢饉 ⇦ 結果　さびれ方は異常 （旧記より＝方丈記） 狐狸・盗人が棲む 死人（しにん）の遺棄

6
登場人物と生物

①下人…どんな人物か？　（主従関係の下）
他の人物はなし　主人に仕える下働きの人間

②きりぎりす（色彩と効果）

色彩
- 丹の円柱 ― きりぎりす
- 赤
- 緑〈秋〉

効果
- 寂しさ
- 唯一の有機物
- 時間

※こおろぎ（茶）晩秋

③鴉（からす）（形象）
鴉が夕焼けの中
死人の肉をついばむ
⇦ 今日　長い草の石段の上　白い糞
緑 ↑ 対比 ↓ 白

項目	色	イメージ
鴉	黒	不吉 死
夕焼け	赤	血
死人の肉	赤	

展開（下人の外見→立体的描写→葛藤）

（1）下人（外見と心情）

外見
- ① 洗いざらし
  - 清涼感
  - 紺の襖
    - 青色でクローズアップ
    - 大きなにきび
    - 赤色の強調
      - ・若い思春期の男
      - ・悩み多い心

心情
- ② 平安時代のサンチマンタリスム→下人の現代人的感傷癖

イメージ（色）

（2）作者はさっき「下人が雨やみを待っていた。」
作者の登場「語り」で立体的描写
謎 作者まで自由に操る「芥川」は超越者なのか？
雨やみを待つ本当の理由は？

状況の由 表理	主人に四、五日前に暇を出された（都の衰微で、失業）
真の理由	雨に降り込められた下人が、行き所がなくて、途方に暮れていた

（3）下人の二つ（Ⓐと Ⓑ）の葛藤
どうにもならないこと 明日の暮らし どうにかするため
⇦ 手段を選んでいる暇はない

	結果
Ⓐ選んでいれば	飢え死に（そうして）犬のように遺棄
Ⓑ選ばないとすれば	すれば　同じ道を低回したあげく この局所へ逢着（「すれば」の片をつける） 結局（　局）⇩盗人になる

下人　大きなくさめ　立ち上がった（行動の起点）
丹塗りの柱のきりぎりすも消えた（時間経過）
夜を明かすため羅生門の二階へ上がる